

10. ヌ カ イ タ チ シ ダ *Dryopteris gymnosora* C. Chr. (仁科)
11. ヌ カ イ タ チ シ ダ マ ガ ヒ *Dryopteris Labordei* C. Chr. var. *Simasakii* H. Itô (仁科)
12. ナ ガ バ ノ イ タ チ シ ダ *Dryopteris sparsa* O. Kuntze (仁科, 南上)
13. エ ダ ウ チ ホ ン グ ウ シ ダ *Lindsaya Chienii* Ching (仁科, 南上)
14. ヌ カ ボ シ ク リ ハ ラ ン *Microsorium Buergerianum* Ching (仁科 南上)
15. タ カ ノ ハ ウ ラ ボ シ *Phymatopsis Engleri* H. Itô (仁科)
16. ナ チ シ ダ *Pteris Wallichiana* Ag. var. *magna* Tagawa (城東)

トビシマクワンザウ (佐藤正己) (Masami SATO: How *Hemerocallis exaltata* came to be introduced to the New York Botanical Garden.)

山形縣飽海郡の飛島は酒田港から約 38km の日本海に浮ぶ周囲僅かに 10km の小島であるが、小さい割合には固有植物や近くの本土には見られない植物があるので注目すべき所である。

この島には古くからクワンザウの 1 種が全島到る所に繁茂し、島人はその花を摘んで食用に供して居たらしい。天保年間に庄内藩の畫家佐藤海宇の畫いた「飛島圖繪」にも母と娘と連れ立つてこの花を摘んでゐる圖と、若い婦人が 2 人で海水で花を洗ひ大きな漬物桶に入れてゐる圖とがあり、よく當時の模様を示してゐる。現在では花は餘り利用されない様であるが、葉を刈取つてムシロやザウリを作り、水田の無いこの島ではワラの代用品にもなつてゐる。

この島には小泉源一博士 (1927 年) や牧野富太郎先生 (1931 年) を始めとして多數の植物學者が渡つて居られ、この植物は ニックロウキスゲ と同定されてゐた様である。然るに先年アメリカ留學から歸られた原寛博士から、飛島産のクワンザウがニューヨークの植物園に栽培されてゐて、それが *Hemerocallis exaltata* Stout として Addisonia 18: 37 (1934) に記載されたことを教へて戴いた。その和名は自然とその話の間にトビシマクワンザウとなつたので一應ここに記録する。

さてこの飛島産のクワンザウがアメリカに渡つたのは、1927 年頃 Stout 博士の下で、*Hemerocallis* 屬の細胞學を研究中の須佐寅三郎氏 (現在山形縣立農專講師) が、全世界のワスレグサ屬を蒐集してゐた同博士の依頼をうけて飛島村の村長に根莖を二、三十個送らせたと云ふのがその筋道で、同氏が嘗て飛島に渡り荒天の爲に滞在の止むなきに至りその折にクワンザウの花を食べさせられた思出を Stout 博士に語つたのがそのきつかけとなつたものの由である。

トビシマクワンザウはその種名が示す様に草丈が高くて 1m 内外に達し、葉心から高さ 1.1—1.3m に及ぶ 1 本の花莖を抜き頂に數個の花を生ずる。花蓋片は 6 枚でほぼ同形で長さ 5.5cm、幅は内片が 2cm、外片が 1.5cm ぐらゐである。果して獨立種として區別すべきものかどうかは、専門家の判定を待つこととして、取あえず日本海の孤島に咲くこの美しい植物のために貴重な誌面を割愛して戴いた。